

答えの鍵-靈的状態(ルカ 9:57-62)

神様は今も約束どおりに世界福音化を成していらっしゃいます。そして、そのために信者の私たちに、教会に答えていらっしゃることに間違いありません。しかし、そのような神様の答えが私と結びつくのはいつなのでしょうか。いつ頃、どういうタイミングで世界福音化のためにいま動かしてらっしゃる神様の答えが私のものとして現れることになるのでしょうか。それは神様は問題なく今も働いて答えていらっしゃるので、その答えに預かるために召されている信者の自分、私が準備できているかどうかにかかっています。つまり、信者の自分の靈的状態が整えられることによって神の答えは動き出すことになるんだということを、信者の皆さんはぜひ心に覚えていただきたいと願います。なので、何より世界福音化の約束を信じて契約として神様は成していらっしゃるし、そのために私に、私の教会に答えていらっしゃるということを信じて、自分の靈的状態を課題にして祈っていただきたいなと願います。それがすべてなのです。ある人にはこういう問題、ある信者にはあのような問題、さまざまなものがあるでしょうけれども、問題が問題ではありません。信者に間違いなければ、信者の靈的状態が問題です。靈的状態こそ神の答えの鍵になるものだということをぜひ覚えて、特に今日の聖書、ルカ 9:1 から今日お読みしましたところまでのすべての内容を通して、靈的状態をどのようにどのような部分を点検してチェックすべきなのか。そして、私たちはどのような靈的状態が求められるのかということを教えられて、それを握ってそのとおりになつていただきたいと思います。

1. 精的状態のチェックで答えは始まる。

まず第一に、信者であれば自分の靈的状態がどうなのかと、それにフォーカスをあわせてチェックすることで答えは始まることになります。

これをぜひ覚えてください。なんで私は長年教会に通っていても、また自分なりには良い信者になりたいと思っているにもかかわらず、なかなか神の答えとは遠く離れている感じがするのか。それに対して靈的状態をチェックし始めると、本気でそこから神の答えは始まるんだということをぜひ覚えてください。言葉を変えますと、いろいろな工夫はしたかもしれません、自分の靈的状態をチェックすることはあまり関心がなかったのか、軽くパスしてしまったのかもしれません。なので、今日から本気で自分の靈的状態は本当に大丈夫なのか。自分の靈的状態はどうなっているのかというところにフォーカスを合わせて集中していただきたいと思います。

1) イエス様と私への理解不足(37-43)

9:37-43 を見ますと、イエス様が変化の山から下りてきたときに、自分の子どもが悪霊に取り憑かれて大変な苦労をしていたので、残っていたイエス様の弟子たちに悪霊を追い出して欲しいとお願いをしました。それで弟子たちが頑張ったにもかかわらず、何も変わっていません。それでイエス様が現れたときに「イエス様。ぜひ悪霊を追い出してください。あなたの弟子たちには無理でした」とお話をしたらイエス様が怒りを露わにして「信仰のないこの時代よ」と叫ばされました。それはこの親に向かってではなくて、弟子たちに向かってなのです。つまり、弟子たちは今までイエス様とずっと一緒にいたのに、そして、イエス様がなさるさまざまなことを見てお話をきいたにもかかわらず、未だにイエスがどういう方なのか曖昧なのです。だから追い出すことができませんでした。そこを私たちは吟味し、省みてチェックしないといけません。自分はイエス様を信じる信者なのに、本当にイエス様のことを正しく聖書的に実際的にわかっているのかどうかというところを問い合わせ、チェックし始めることが靈的状態をチェックすることです。長年、親に連れられて、あらゆるきっかけによって教会に通い始めてイエス様のことを知り、イエス様を信じて賛美もします。しかし、素直に本気で吟味して考えてみたら、自分が信じるイエス様がどういう方なのかが曖昧なのです。それでは世界福音化のための神の答えはなかなか期待できないでしょう。私たちが良い人間だから、神様が私たちを祝福するわけではありません。そういうことはこれっぽっちも心配しないように、気にしないように。自分が信じているイエス様が本当にキリストなのか。キリストとして信じているのか。そこをチェックしないといけません。それが靈的状態を吟味することなのです。そして、弟

子たちはそのことが曖昧だったので、イエス様に従っている自分たちがどんな存在なのか、自分が誰なのか、そこも曖昧なのです。当然でしょうけれどイエス様はキリストなのです。悪霊が逃げ去るしかない神の御子キリストなのです。そして、そのキリストであるイエス様を信じている信者は、キリストがともにいらっしゃるので、キリストと同じ権威を持つ王である祭司なのです。神の神殿と呼ばれる者なのです。外見的にうわべ、自分の人間的な肉体的な条件はいろいろあるでしょうけれども、にもかかわらず私は神の神殿であり、キリストの体なる教会であり、王である祭司なのです。その理解がまだ足りないです。そうなのかどうか、自分はどうなのかということを吟味してチェックしていく、それは素直にならないといけません。それが神様の恵みなのです。人間のいちばん難しいところ、罪人してのいちばんの習性は、いま申し上げましたこの部分に素直に取り組むことを断るわけです。だから、神に恵まれた人は素直に、あらゆるきっかけを通して、特にさまざま限界を通して、この部分にたどり着くようになります。自分がいま従っているイエス様は、本当に誰なのか。そのイエス様に従って信じている自分は誰なのか。

2) 十字架の奥義への無知(44-45)

そして、44節から45節は、その後、イエス様がご自分が苦しめられて十字架で死なれることをおっしゃいます。しかし、そこに書いてあるのは、それを聞いていた弟子たちは意味がまったくさっぱり分かっていない。むしろその話が怖くなって、それ以来、口にもしてなかつたと書いてあります。つまり、靈的状態はどのようにチェックするのかというと、イエス様の十字架の奥義について自分は本当に知っているのかどうか。弟子たちはイエス様に従っているにもかかわらず、十字架の奥義に対して無知なのです。自分はどうなのか。十字架の奥義は何なのでしょうか。神の御子、罪のない神様ご自身、創造主であるイエス様が十字架で悲惨な死を遂げない限り、解決不可能な靈的問題を抱えている人間なのです。だから、十字架で死ななければなりません。十字架の奥義ということは神の愛であり、人間の本当の絶望についてわかっているかどうかなのです。信者なのに、教会に通っているのに、その部分が曖昧なのです。残念ながら今現在は、悪魔サタンのしわざであると思いますが、世界中のキリスト教会が十字架の奥義について曖昧なのです。十字架という言葉は使います。しかし、その奥義については無知なのです。その靈的状態では教会がいくら成長したとしても、全く世の中のために役に立つものにはなりません。神様が望まれる教会、信者にはなれません。これが答えが始まるために私たちがチェックすべき靈的状態の内容です。

3) 自慢と誇りへの肉の基準(46-48)

このようにおっしゃっているにもかかわらず、46節から48節を見ますと、弟子たちは誰が偉いのか、誰が大きいのかということで争っていました。つまり、自分の内側で自慢、誇り、幸せ等々の基準が肉的なものではないのかということをチェックしないといけません。弟子たちの場合、イエス様に対して曖昧、自分が誰なのかも曖昧、十字架の奥義も曖昧なので当然な結果でしょうけれども、希望も望みも願いも自慢も誇りも幸せも基準がすべて肉的なもの、人間的なものなのです。社会的に大きくなればそれが成功だと思い、いまだにそのサタンのやぐらのままなのです。その基準のままなのです。だから、そういうことで争っていました。自分はもしかして祈りの課題がそういうものではないのか。自分が誇りに思って価値あると思っているものが、もしかしてその基準が肉的なものではないのかということを吟味しないといけません。そこが修正されないと神の答えは始まらないのです。その後、弟子たちがイエス様に報告します。

4) 本質が欠けた組織こだわり(49-50)

49節から50節において、誰かさんがイエス様のお名前によって悪霊を追い出す働きをしています。だから彼らに別行動しないで私たちの組織の中に入つて一緒に動きなさいと言つたのですが、彼らは言うことを聞かなかつたので私たちは怒りましたと言つたわけです。するとイエス様が、私たちに反対しない者は私たちの味方なんだというお話をされます。もちろん組織、団体、形式というのは大切なことです。しかし、うっかりするといま弟子たちの状態がそういう状態なのですが、本質が欠けたまま目に見える形式的なもの、組織そのものを優先してしまう場合があるのです。そうすると変なところに流れて。変なふうに固まってしまうことになります。もしかしたら私たちの内側にも本質が欠けているまま違う何かにこだわりすぎている、そういう部分はないだろうか。組織を無視するわけではありません。しかし、組織は本質

のためにあるものであって、そこを忘れて私たちの組織の中に中に…そういう部分をチェックしていかないといけません。自分は福音の本質が曖昧なまま他の何かに、それが正しいことであっても、必要なものであっても、それにこだわりすぎている部分はないのかということをチェックするところから神様の答えは始まります。

5) 人間的なプライドの戦い(51-56)

それから 51 節から 56 節を見ますと、イエス様と弟子たちがどこかに入ったときに、彼らが全く歓迎して受け入れることがありませんでした。そのときに「主よ。天から火をもたらして彼らをぐちゃぐちゃにしましょう」とお願いしたのです。私たちを歓迎して待遇して受け入れることがないということは許せないということなのです。もちろん気持ちはわからないわけでもありませんが、ついつい福音ではなく、人間的なプライドの戦いに走る場合があるのです。それが今の弟子たちの靈的状態なのです。それに対してイエス様は、「そうだ。私たちが世界を助けるための福音の戦士ではないのか。彼らがだめになるのは当然だ」と仰らないで、そのように怒って怒りを露わにしている弟子たちを責めました。あなたがたが間違ったんだと。迫害され反対されること、ありうることなんだと。それに聖霊の導きによって正しく対応しないといけないものであって、人間的なプライドを優先して、そのプライドの戦いに走るということは幼稚なことなんだよと。でも弟子たちはイエス様がキリストであることを知らない。自分が誰なのか、その存在の価値もよくわかっていない。十字架の奥義の理解も曖昧なのです。なので、彼らの内側ではこういう戦いしかありません。誰が大きいのか。なぜ私たちを歓迎してくれないのかという戦い。もし私の内側にもこのように人間的なプライドに触られると死ぬことよりつらいという人はいらっしゃらないでしょうか。気持ちは充分理解できるけれども、それがその人の靈的状態なのです。そのままで神の答えとつながることはなかなか難しいです。

6) 優先順位(57-62)

それから、今日お読みしました聖書のところには、ある人はイエス様についてきますと堂々と宣言したときに、イエス様には枕を置くところもありませんと言いました。それから、他の人にイエス様が「ついて来なさい」と言ったら「はい、わかりました。しかし、その前に父親の葬式を済ましてから行きます」と答えました。そのときにイエス様が、「死んだ者は死んだ者に任せなさい。あなたはいのちの福音を宣べ伝えなきゃいけないよ」と答えます。普通に聞きますとなかなか理解できないでしょうけれども、福音より、福音宣教より、礼拝より先に優先するもの、価値あるものがあるわけです。優先順位が間違っているわけです。イエス様について行くというのは、「わかりました、しかし...」と「しかし」がつくような、そういう条件は一切存在しません。イエス様はキリストであり、Only 絶対なのです。家庭も大事です。家族も大切な存在です。しかし、極端に申し上げまして、それがイエス様を信じる信仰を邪魔することになれば決断しなければいけません。家族は私たちに救いを与える存在ではありません。救いはキリスト・イエスの他にはありません。どんなに素晴らしい知識と論文などが自分の中にあったとしても、それは私を地獄から助け出す救いには 1mm も関係ありません。なので、イエス様に従うことでの博士の学位を捨てないといけない場合は、喜んで捨てないといけません。でも、私たちの内側の靈的状態は、福音、福音宣教、礼拝より他に何かを優先する、そういう状態なのです。このような状態ではないのかということをチェックしていかないといけません。これがルカの福音書 9 章を通して短く申し上げましたが、信者の内側の靈的状態をどのようにチェックすべきなのかという内容でした。この内容を素直にチェックして、素直に認めて、自分の靈的状態はこのままではいかん。ここをちゃんと整えていかないとと思うところからもうすでに答えは始まります。人生が変わり始めます。教会に長年通っていても一度も真剣にこのようにチェックしながら向き合って、靈的状態の改善のために集中する時間を持つことがあったでしょうか。神様は私たちを愛して答える主人公にすることを願っていらっしゃるので、このようなようなチェックがないまま生ぬるい信仰の信者の場合に、神様なりのやり方で刺激を与えてまでチェックするようにされます。その刺激というのはさまざまなものがあります。急に家族の誰かがどうなったとか、急に治らない病気にかかるてしまうとか、急に四面楚歌のような状況に取り囲まれるようになったなどさまざまな状況を許されますが、神様の願いは一つしかありません。急に耐えられない精神的な状態に追い込まれることになった。それは私たちを苦しめるために、私たちにいたずらをしていらっしゃるわけではありません。目的は一つなのです。本当に靈的状態をチェックしてみなさいよ。他の人のせいにしたり、言い訳ば

かりしたり、不平不満、悩みばかりしないで、自分の靈的状態を素直に見るようになさい。それで「ああ、そうだったのか。自分の靈的状態を変えなきゃ」と思ってほしいというただ一つの願いなのです。神様の願いは。そのために皆さんに耐えがたいさまざまな試練も許されるわけです。目的は試練ではありません。

2. 超越の靈的状態で答えの時刻表は動く。

それでこれを素直に受け入れてチェックして二番目です。このすべてを超越する、このような状態から自由になる超越の靈的状態になることで神の答えの時刻表は動き出すことになります。

これからバンバン勝利の人生の門が開かれることになります。ぜひ信じていただきましょう。

1) Only 絶対キリストの告白

超越の靈的状態は何でしょうか。今までこだわっていたそのすべてがちりあくたと思うことができるほどキリストが曖昧ではなくて、イエスはキリストで Only 絶対キリストという告白を心からわかってささげるようになる状態、これが超越の靈的状態です。Only、絶対という言葉は、他のすべてを超越するということなのです。他の何もかもが何一つ問題にならない、そういう意味なのです。イエス様はキリストなのです。Only 絶対というのは、私たちにある問題、人の問題が、私たちが今まで思っていて、当然そうだと思っていた問題ではなくて、今まで一度も気づいていない靈的問題であるということに気づくことなのです。それを素直に認めることなのです。つまり、世界中にさまざまな問題がありますが、問題は実は一つしかありません。人々は神様を離れて悪魔に支配されているわけです。論文でも愛情でも政治制度でも教育でもこれには敵わないわけです。だからキリストが来られました。イエス様はそのキリストなのです。だから他の宗教がいらない、間違い、そういう上からの目線ではなくて、他の宗教はキリストではありません。だから Only キリストなのです。絶対キリストです。答えはキリスト一つしかありません。曖昧なことも迷うような躊躇するような混乱するようなことなども一切ございません。スッキリされます。それが癒しということであり、暗闇が碎かれたということなのです。いまだに皆さん的心の中で、この野郎、誰かのせい、そのために、あれがあつたから…ということがあれば、皆さんの靈的状態はまだまだなのです。Only ではありません。家庭環境がどうなのでしょうか。親がどれほどひどい人間なのでしょうか。それは私にとって何一つ問題になりません。それが問題であればキリストが答えになりません。また、キリストの答えにしても、バプテスマのヨハネのような、そういう答えにしかなりません。問題は唯一なのです。答えも唯一なのです。

2) カルバリ山の契約、オリーブ山のミッション、マルコのタラッパンの体験

この Only 絶対キリストを告白することで、その人の内側にカルバリ山の契約が通ることになります。カルバリ山の契約は何かと言いますと、今まで申し上げましたように、だからこそキリストの十字架、キリストこそが最高の価値であり、絶対価値であるという告白であり、それがカルバリ山です。すべてがちりあくたになります。それが必要なのか、良いものなのか、そうでないかと関係なく、全部がちりあくたになり、キリスト・イエスが絶対価値、最高の価値としてその人の心の中に正しく刻まれることになる、これがカルバリ山であり、そのキリストのゆえに私の人生のすべての問題は実際に終わったと。この契約が通るようになります。それが靈的状態が改善されることです。どういう過去を歩いてきたのか、今現在どういう問題があるか関係なく、すべての問題はもう終りました。そのように自分の内側で正しく整理されないといけません。終わった問題を通して今の問題を見るのと、終わっていないと思って問題を見るのとでは天と地の違いなのです。そこがすべてです。ここが超越の状態です。そのようにカルバリ山の祝福が刻まれることによって、やっとオリーブ山のミッションが見えてくるようになります。

3) サタンのやぐらが碎かれ

そのときから初めてこの世界が世の中が自分がいる現場がただ現場ではなくて、サタンの国であり暗闇に覆われていることが見えてきて、キリストの福音、キリストの光のほかには希望がないことが見えてくるようになります。それを神の国と言います。キリストの福音が伝えられることによって聖霊が臨まれまし

て、暗闇が碎かれて、悪霊が追い出されること、それ以外には希望がない。前にも申し上げましたように、いまだにこの世界で羨ましい人、憧れの人などがいるのでしょうか。靈的状態はまだまだなのです。何が羨ましいのでしょうか。救われるべきたましいしか存在しません。暗闇に捕らわれているたましい、暗闇に捕らわれている国会議員、暗闇に捕らわれている芸能人しか見えないので。そこでなるほどだから私がそこにいるんだ。私の内側にその答えになる唯一のキリストの光を持っているから、それでミッションが生まれるわけです。それを神の国と言います。世の中、人々に必要なのは神の国なのです。なぜでしょうか。見えてきたのだから、サタンの国が、暗闇の世界が見えてきたのだから。見えないのでしょうか。これが見えてくると、237、5000未伝道種族が全部見えてきます。文化の違い、経済の程度、政治の状況などいろいろ違っていても、答えはキリストのほかにありません。オリーブ山のミッション、カルバリ山の契約、キリスト、オリーブ山の神の国のミッションがわかったときに、マルコのタラッパンの体験ができるようになります。そのとき、その人が礼拝を捧げるその場所が、その人が祈りを捧げるそこが、マルコのタラッパンになります。この内容を握って祈りをもって集中することになるでしょう。そのときに25の答えが現れることを体験するようになります。自分の力と能力と環境などと全く関係なく、ミッションが全うできる答えの門が開かれることを必ず見るようにになります。これでこそその人の靈的状態が改善されることになります。そのときにその人の内側に自分も気づかないうちに頑なに立っていた悪魔サタンのやぐらが碎かれることになります。それで超越の状態になります。7つの旅程を歩むと言っているでしょう。その7つの旅程の特徴は、超越なのです。何があっても揺れない土台の上で、すべてを働かせて益となる神の祝福の秘密の中を歩くようになります。このような勝利の人生を進むようになります。自分で頑張って走っていくのではなくて、押されて進むようになります。証人となります。神様の答えは今も変わることなく注がれています。しかし、その答えが自分と結びつく、そのタイミングは自分の靈的状態が改善されるときなのです。他の何かのせいにしないように。これを知らないからまたこっちからあっちに行けばいいか、満足がないままあれをやればいいかといろいろなことをやりますが、それはさまよい続けることなのです。自分の靈的状態にフォーカスをあわせるように。その靈的状態が改善されることで、神の答えが現れることを一度でも体験しなければいけません。それを証人と言います。信者であれば誰にでも許されている神の約束であり、祝福であることを覚えてください。

結論を申し上げましょう。なので今日のメッセージを握って、キリストにあって自分の思い、自分の考えではなくて、どこからか聞いた話ではなくて、キリストにあって私は誰なのかということを深く考えましょう。神のみことばに目を通さないといけません。キリストにあって自分は誰なのか。ローマの植民地であり、社会の下っ端をくぐる人間であっても違います。その人たちは御座の祝福の主人公なのです。キリストにあって信者の自分は誰なのか、それを探るのが7つのやぐらです。そこを深く考えて、自分探しに成功するように。親が変な親だから私は不幸な寂しい人間だ。それは自分探しに失敗しているからです。キリストにあっていくらひどい環境であっても、たとえ濡れ衣を着せられて刑務所の中に入れられたとしても、兄たちにいじめられて殺されかけたとしても、ヨセフは御座の祝福の主人公なのです。自分は7つのやぐらをしっかりと持っている幸いな者であることを一度も忘れたことはありません。これがその人の靈的状態です。なので当然、私が進むべき道はどんな道なのか。それが7つの旅程です。先ほど少し申し上げましたように、その内容をこういう意味合いをもって深く深く黙想しましょう。そして、ならば私に用意されている答えは一体何なのか。それが7つの道しるべです。皆さんにはカルバリ山、オリーブ山、マルコノタラッパンの答えが用意されていて、皆さんが宣教の主人公としてがらりと変わる答えと、人々を癒す癒しの働き人としての答えと、すごい転換点の主人公として、ローマの福音化の主人公としてしっかりと目覚めて確認させられて、そして、そのとおりに導かれる答えが用意されているのです。これが信者です。そのことを深く黙想して、その答えをもって祈りましょう。これをまず確認して祈ることです。祈って行くときに靈的状態が変わっていくようになります。それに伴って神の答えが進んでいくようになるということをぜひ体験して、悪魔が震えて逃げ去る主人公になりましょう。

(祈り)

恵み深い父なる神様。ありがとうございます。神の恵みによってキリスト・イエスを信じて神の子どもになりました。にもかかわらず、靈的状態が全く変わっていないまま悪魔に振り回されるばかりの人生を歩

んできました。素直に認めて、他の言い訳をすべて捨てて、自分の靈的状態にフォーカスをあわせてチェックするところからスタートできるように、素直な思いを恵みによって信者ひとりひとりに与えてください。その結果、超越の靈的状態になり、証人として神様に用いられる勝利の人生を歩んでいけるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。